

「伝えたことが伝わったことではなく、伝わっていることが伝えたこと」  
辻内 裕也

先月の参議院選挙で我が自由民主党は歴史的な大敗を喫した。選挙前から公的年金の記録不備問題や相次ぐ閣僚の失言、政治資金の不透明な処理問題等が連日マスコミで報道された。この言わば「故意に創られた争点」の中で戦わざるをえない厳しい選挙戦であった。

しかし、昨年10月に誕生した安倍晋三内閣を冷静に見直してみると、教育基本法改正、防衛庁の省昇格、国民投票法の制定、公務員制度改革など歴代の内閣が何十年も先延ばしにしてきた問題にも積極的に取り組み結果を出しているのだ。この「確かな実績」があるにも関わらずそのことが有権者に正確に伝わらなかったことは残念としか言いようがなく、また同時に今回の敗因の全てではないだろうか。

政治家に求められる資質というものは様々であろうが、現在特に必要とされるものに「国民に確かなビジョンを語れるかどうか」ということが挙げられるであろう。このことは小泉純一郎前総理や石原慎太郎都知事の人气が雄弁に物語っているはずだ。今のような時代の大きな変革期の中では一時的に社会が混乱しその流れに上手く対応出来ない人々が出現する。そのことがさらなる混乱を招くこととなる。

しかし、そのような時に「一国のリーダー」としてなすべき事は、国民に安心感を与え、冷静な判断力を失わせないことだ。「今、この国にはこのような問題がある」、「この問題を何故、解決しなくてはいけないのか」、「問題を解決する過程で多くの犠牲を出さざるをえない」、「しかし、その犠牲を受けざるをえない人々には国が責任を持って守る」、「だから安心して私に国創りを任せてほしい」というようなことを自信を持って示すことが求められるはずだ。

そう言った意味では、現在の安倍内閣は「美しい国」や「戦後レジームからの脱却」という抽象的な言葉のみが先行し、美しい国の具体的な姿や、何故、戦後レジームから脱却しなくてはいけないのかといった理由や目的が明確に伝わっていない気がする。

安倍内閣は今回の国民の審判を謙虚に受け止めるとともに如何に国民に自分達の考えを「正確に伝えるのか」ということを真剣に考える必要があるはずだ。

安倍総裁には先月の廣瀬先生の講義のなかで教わった「伝えたことが伝わったことではなく、伝わっていることが伝えたこと」という言葉を送りたい。